

北海道獣医師大会・北海道地区三学会

プロダクションメディスン研究フォーラム参加報告

さる九月二日から四日までの日程で、札幌市において平成二十一年度北海道獣医師大会・北海道地区三学会、プロダクションメディスン研究フォーラムが開催されました。今回それらに出席してきましたので、その中からいくつかの話題について紹介したいと思います。

日程の最初に開催されたプロダクションメディスン研究フォーラムは、主なテーマとして「乳牛のストレス」が取り上げられ、繁殖とストレスの関係について講演されました。その前段に英国のロバート・ドブソン氏から「英国の酪農状況について」の講演がありました。ドブソン氏はご自身も酪農家であり、また奥様はリバプール大学教授で今回のパネラーとして講演されました。英国では、一戸あたりの飼養頭数や生産乳量（一九九九年一頭あたり七〇〇kg）は増加している一方で、国内総飼養頭数（二〇〇八年24ヶ月齢以上一九〇万頭）や酪農戸数（二〇〇九年一一五〇〇戸）は減少しているとのことであり、傾向として日本と同様の動きであることが伺われました。また、生産された生乳の五三％は飲用乳として利用され、また二八％がバターやクリーム、ヨーグルトなどに加工されているとのことでした。チーズへの加工割合が高いのが日本と大きく異なるところで

す。また英国では、牛の結核が大きな問題となっており、最近では月四〇〇頭前後が結核のため淘汰されているそうです。

学会会場では牛乳房炎に関する演題が三題発表されました。そのうち二題を紹介します。

1. 根室地区NOSA I 中田悟史獣医師「夏季の大腸菌性乳房炎発生指標として食中毒警報が応用できるか」

隣の根室地区NOSA Iからの発表でした。夏になると乳房炎が増えることは多くの生産者の方が実感されていることと思います。この発表では、大腸菌性乳房炎の発生状況を、通年・夏季・食中毒警報発令時に区分して分析しました。食中毒警報はある基準以上の高温や多湿となる場合に発令されます。根釧方面でも、少ないながら食中毒警報が発令される場合があります。その結果、大腸菌性乳房炎の発生頭数、治らずに死産事故となったり除籍となった頭数は、通年、夏季、警報発令時の順に増えていることを明らかにしました。夏場は大腸菌に限らず、他の菌種による乳房炎も増える傾向にあります。これは、高温多湿の環境が原因菌の増殖に適した条件となることや、牛に与えるストレスの影響によることを考えられます。夏場は一層搾乳衛生や環境衛生に気を付ける必要があることを

物語っている、と捉えることもできるでしょう。

2. 酪農大樋口豪紀准教授「牛マイコプラズマ性乳房炎の迅速診断に関する研究」

マイコプラズマ（マイコ）性乳房炎は発生が稀な乳房炎ですが、近年特に大規模牛群を中心に鉋路管内でも発生が相次いでいます。マイコは診療所での乳汁培養検査では検出できないため、検査可能な施設に乳汁検体を送り、そこで乳汁培養を実施してマイコを検出するという検査体制がとられています。この方法では検体送付にかかる時間と培養にかかる時間を合わせて、結果判明までに概ね一週間という時間が必要です。今回発表された方法は、PCRという診断法を用いて乳汁中のマイコプラズマの遺伝子を検出し、マイコ乳房炎であるかどうかを診断するという技術です。この方法では乳汁検体を検査機械にかけて最短三時間で診断が可能とのことであり、従来の培養法と同等以上の精度でマイコプラズマ性乳房炎を診断できるとのことでした。マイコ乳房炎は伝染力が強く、検査に要する時間が防除対策上の大きな障害となっています。このような迅速検査体制が実用化されれば、防除対策上大きな力になることが期待されます。

（虹別家畜診療課 山本 康了）